

カンパラ通信～ナカセロの丘から

第13回 日本とウガンダの架け橋となっているウガンダ人―サミュエルの巻

今回は、日本とウガンダの架け橋となって頑張っているウガンダ人を紹介したいと思います。その人物は、サミュエル・ムギシャと言います。私は、彼とは2006年12月にカンパラの日本大使館の執務室で初めて会いました。その当時の私は大使館で参事官をしていました。東京の外務省から、後藤彰さんというウガンダでビジネスを展開しようとしている藤枝市国際友好協会会長がウガンダを訪れるので、ウガンダの事情を説明するようにとの指示を受けました。後藤彰会長が大使館を訪れた時に同行していたのがサミュエルでした。日本語を上手に操る彼に驚きました。サミュエルは、若い時に静岡県に留学し、その時に後藤会長と知り合ったのが縁で、後藤さんがウガンダに来るきっかけになったということです。面白かったのは、2002年11月にウガンダを訪れた浜松大学の昆虫学の教授との縁で日本に来ることができたのはいいのですが、全く日本語がわからずにお金も十分ない中で成田空港に到着したムギシャが浜松まで自分一人に来るように言われ、苦労しながらも無事にたどり着いたということです。成田から東京まで出てくるまでは何とかなるとしても、東京に着いてから乗り換えをして浜松まで行くなんて、人生において列車になんか全く乗ったこともない青年がよくも着いたものだと驚いてしまいました。



サミュエルと後藤彰氏との再会



サミュエルと後藤氏親子と

それから10年近くの月日が流れ、2016年6月に私が大使として再びウガンダの地を踏んだのですが、同じ年の10月にサミュエルが電話をしてきたのです。何と、後藤彰会長がウガンダを再訪するので会ってほしいということでした。サミュエルは、現地の新聞で私がウガンダに帰って来たことを知っていたのでした。後藤彰さんは、3人の友人と一緒にウガンダを訪れていたのですが、今回は米の生産をやってみたいということでした。サミュエルは、今は、BIC TOURSという観光代理店を経営していて、後藤さん一行を案内す

るとともに、ルワンダとの国境に近いところにあるゴリラ・トレッキングの手配とガイドをしてきたとのことでした。ウガンダは観光の振興を重点政策にしている、昨年8月のT I C A D VIの際に安倍総理大臣と会談したムセベニ大統領も日本からの観光客の誘致を要望していたくらいです。この関係から私のサミュエルとの接触も多くなっていきました。それでは、彼が日本での滞在期間をどのように過ごしたのかをまずご紹介します。

日本語は、2002年12月に日本に到着後すぐに静岡市の国際ことば学院に通って勉強したそうです。一所懸命勉強して半年後には日本語を話すことができていたそうです。その学院では外国人による日本語スピーチコンテストがあり、それに参加して、故郷のウガンダの田舎での自らの少年時代のことを話しして2位になりました。見事なものです。しかし、その間もお金を稼ぐ必要があり、近くの八百屋で3ヶ月くらい働いていました。考えてみてください、黒人が八百屋さんで野菜を売っている姿を。少しおかしくなってしまうですね。その後は、西川ふとんを販売しているスリーピング・ハウスというお店で働いていたそうです。愛嬌あふれた顔で日本の布団をセールスするので珍しがられたそうです。そうこうしているうちに2005年に愛知万博が名古屋近郊で開かれました。その時に在京ウガンダ大使館がサミュエルの流ちょうな日本語に着目してウガンダの展示場でボランティアするようお願いしたそうです。それをきっかけにウガンダの観光代理店と関係を持つようになり、日本にいる間にも旅行業の知識を身に受けていきました。こうしているうちに、2006年も押し詰まって来て、サミュエルは今後の進路を考えていました。日本滞在中もウガンダに住んでいるたくさんの弟や妹に送金をしていましたが（彼の故郷は一夫多妻制でお父さんには28人の子供がいたそうです。そのお父さんがエイズで亡くなった後サミュエルがずいぶん弟や妹の学費の面倒を見ていたそうです。）、日本の物価が高いため思うように送金できず、ウガンダに帰ることを考えていたそうです。そして、ついに同2006年12月にウガンダに帰国しました。

いよいよ、これからがサミュエルが日本とウガンダの架け橋になる展開に入っていきます。まずは、日本とウガンダとのビジネス分野の仲介です。このウガンダに帰国する時にウガンダでビジネスをしたいという後藤彰さんを連れていくことになりました。サミュエルは、静岡県にいる時に日本語スピーチ・コンテストでよい成績を収めたので、県内のいろいろなところで講演したりラジオ番組に出演したりする機会が増えました。その中で、藤枝市の国際友好協会で講演することがあり、その会長を務めていた後藤彰さんと知り合うようになったのです。後藤彰さんがウガンダで廃棄物処理のビジネスができないかとのアイデアを持っていて、後藤彰氏のウガンダ訪問に付き添う形でサミュエルはウガンダに帰国することになりました。こうして2006年の12月に筆者と出会うことになるのです。しかし、後藤さんの廃棄物処理のビジネス・アイデアはうまく行きませんでした。しかし、その後も二人の関係は続き、後藤彰さんがウガンダで何かやりたいという意欲も引き続き旺盛で、2016年の10月に後藤さんはサミュエルの案内でウガンダを訪れ、稲作に着

手する決意をしました。そして、2017年2月にはご息の正義氏をウガンダに送り込み、サミュエルの力を借りて稲作の具体化に着手し、この7月にはついにウガンダ中央部に稲作を行う目的で200エーカーの土地を借り上げ、Masago Japan Ltd という会社を設立しました。200エーカーと言えば東京ドーム17個くらいという広い土地です。サミュエルもこの会社の役員となっています。これに加えて、ウガンダのドライ・パイナップルを日本に輸入している Far East という日本企業があります。この企業の佐々木社長ともサミュエルが親しく、今年に入って同企業のウガンダでの活動範囲を広げることからウガンダに現地会社を立ち上げることになり、サミュエルはその手続を助けました。その現地会社はサミュエルが社長をしている旅行代理店の BIC TOURS に置かれています。このようにサミュエルは日本とウガンダの間のビジネスの架け橋となっています。



夫人と一緒にサミュエル



BIC TOURS 社員と一緒に

二つ目は、観光分野です。既にお書きしたように、愛知万博のウガンダ展示場の案内をするうちに旅行者とつながりもできて、2006年秋の JATA 主催の旅博にウガンダが初めて参加するようになって、ますますサミュエルの活躍の場が観光に移って行っていました。こうして、ウガンダに戻ってからは地元の旅行代理店で働いていましたが、ついに2009年になって自らの BIC TOURS をカンパラ市内に立ち上げました。従業員7名を従えて日本人観光客を専門にウガンダの美しさを紹介しています。サミュエル本人に聞きますと、年間300人くらいの日本人観光客を扱っていて、そのうちの半分以上はゴリラ・トレッキングだとのこと。このほか、「地球の歩き方」社の取材に協力して、その「東アフリカ篇」でのウガンダ紹介の部分の充実に随分貢献したということです。

最後の三つ目の分野はNGO活動です。サミュエルは、生まれ故郷のウガンダの田舎でエイズで親を失ったため学校へ行けない孤児たちを助けるためにニヤカ・エイズ基金とニヤカ孤児のための学校のボランティア活動をしています。地球の歩き方でこのNGO活動が紹介されました。これが川崎市を本拠地とするNPO法人 Heart & Earth の目に留まり、

「未来を担う子ども達の絆を深め繋がるのが大切」との考えから同NPO法人代表の故郷である静岡県伊東市でこの8月に開催する「五大陸交流祭 in 伊東」にニャカ孤児の小学生1名とその付添いで先生1名が招聘されました。



サムエルについての全2頁記事

以上のように、サムエルは、様々な形でウガンダと日本との絆を深め、両国国民の交流の架け橋となって大活躍しています。サムエルは現在42歳とまだまだ若いので、ますますの活躍を大きく期待しております。

(以上)